慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現実的人間研究の二つの著作
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.9 (1937. 9) ,p.1379(149)- 1390(160)
JaLC DOI	10.14991/001.19370901-0149
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370901-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現實的人間研究の二つの著作

藤林敬三

現實的人間研究として、私が此處に紹介し、批評しやうとする二つの著作は一つは社會學から、他は心理學からの所産である。從來の人間研究が多く徒らに純粹理論の彼方に逃避し、現實を捨象したところにその對象を求めやうと努めて來たのに比して、次ぎに紹介する二つの著作はその各々の科學的立場から人間生活の現實に近づかうとするものである。かくの如き科學的努力の重要さは今更ら私が此處に說く必要のないものである。がそれが最近の、またある場合には今後の、價値ある科學的努力の傾向を示してゐることだけは事實である。

A. Schondorff, Grundlegung einer volkswissenschaftlichen Lehre vom Menschen, begründet auf Kriegsbriefen deutscher Studenten, 1936.

ショーンドルフの著作は云はゞ社會學的人間學の一勞作であり、彼の企圖を以つてすれば社會學的人間類型學 Soziologische Menschentypik の樹立を目的としてゐる。

この社會學的人間類型學は、彼に從へば、從來の社會學に對して次ぎのやうな地位を占める。社會學は、ワルター(A. Walther)に從へば、(一)行動學、(二)關係學、(三)集團學、(四)社會的＝文化的全關聯に關する學の四體

系に區別せられるのであるが、人間類型學は大體行動學としての社會學に屬すると考へられる。但し從來の行動學は社會的に行動する個人が一定の關係、一定の集團に屬してゐることを考慮せず、從つて一定の行動樣式及びそれに應ずる人間類型が各個人の置かれてゐる一定の關係及び集團に對照せしめられることをも考慮してゐない。これに對して彼の企圖する人間類型學は單なる行動學に屬するものではなくして、社會學の他の諸體系の問題をも充分考慮するものである。

更らにシューンドルフの主張する人間類型學は人間の現實的行動の認識を目的とする。彼の云ふ所に依ると、從來のドイツ社會學に欠けてゐるのは理論ではなくして、經驗である。生きた現象の流れから遊離し、從つてまた健實な理論の基礎を欠くことは、彼がその人間類型學に於いて正に避けやうとする所である。

シューンドルフの著作は內容としては、先づ類型概念の吟味に始まつて、人間類型學の社會學的諸可能性を檢討し、最後に類型の社會誌的研究を示すことに依つて、右の現實的社會學の主張を滿さうとしてゐる。此處で私は些か彼の人間類型學を構成するその積極的努力である類型の社會誌的研究を紹介し、且つそれを批判して置き度いと思ふ。

シューンドルフが現實に近づかうとする方法は類型社會誌的研究方法 Die typensoziographische Arbeitsmethode と稱せられるものであつて、それには二つの可能なる方法があるとせられる。一つは質問紙を用ふる方法であり、他は手紙、日記等の自己證言の資料を利用する方法である。この二方法中彼は後の方法を勝れりとするのであるが、質問紙法の欠點は、彼の云ふ所に依れば、此の場合回答者が情緒的反應から直接的にではなく、認知的態度を取ることであり、從つてそれだけ純眞さが欠けてゐることであり、更らに回答者に眞面目な回答の意圖があるか否かが疑問であつて、從つて全體として質問紙法はその回答の確實性を多少疑はしめるものを持つてゐる。かくて彼がその類型の社會誌的研究方法として採用せるものは、多數の個人の手紙を資料として利用することであつた。そして彼に依つて專ら利用せられたものは、その著作の表題中に既に示されてゐるやうに、歐洲大戰に參加せるドイツ人學生の戰場からの手紙である。

シューンドルフはこの手紙を資料として各個人の社會的行動に對して重要な關係を持つと見做される動機を、(一)國民と祖國、(二)神と死、(三)自然と藝術、(四)家族と故鄕、及び(五)戰友、これ等に對する關係の裡に求めてゐる。そして動機のこれ等の諸點を抽出し、これを明かにすることに依つて、各個人の社會誌 Individualsoziogramm を作成する。この各人の社會誌の多數のものを比較對照して、此處に從軍せるドイツ人學生と謂ふ特殊集團に對する類型社會誌 Typensoziogramm を形成することが、彼の人間類型學の目的に達することである。

吾々は先づかくの如き人間類型學に對してその所謂類型社會誌的方法を批評しなければならない。シューンドルフは其處で單に手紙を資料として利用してゐるに過ぎないのであるが、事實彼の意圖する所は、從來理論的に偏したドイツ社會學に對して現實的研究を重視せる最近のアメリカ社會學の方向を考慮することであり、彼の社會學的人間類型學を、例へばトーマス及びツナニッキーの研究(W. Thomas and F. Zuaniecki, The Polish Peasant in Europe and America, N. Y. 1927.) 或はボガーダスの研究 (E. S. Bogardus, The New Social Research, Los Angeles 1926. Derselbe, The City Boy and His Problems, Los Angeles 1926.) の、所謂アメリカ社會調査の範例に從はしめやうといふにある。果して然らば、彼が社會誌的方法として單に二つの單純なる方法だけを擧げて、その優劣を判定し、彼自身の研究を單に手紙の資料に基礎づけて、至極恬淡なる態度を示してゐることが、吾々には

甚だ不可解であると云はなければならない。況んや手紙の資料としての價値に關して尙ほ吟味すべきものあるに拘らず、これを全く不問に附してゐるに於いてをやである。かくてこれを極端に批評すれば、アメリカの社會調査、ドイツの社會誌學の研究の如きは、未だ充分ショーンドルフには理解せられてはゐないやうである、と云はなければならないであらう。

ショーンドルフの社會學的人間類型學は、その吾々に示された努力だけに從つて見れば、單に特定種類の、然かも從軍せる學生と云ふが如き全くの特別の集團の類型社會誌の確定に終つてゐるに過ぎない。吾々は先づかくの如き類型社會誌の客觀的、現實的確定が尙ほある意味に於いて重要であることを否定し得ないとしても、更らに吾々の問題は正常なる各種集團の類型社會誌の社會學的必然性を理解することでなければならない。しかるにこの方面の問題は彼に於いては全く等閑に附せられてゐる。從つてこの點では彼の人間類型の社會學は全く異例の類型社會誌の研究に過ぎないのであつて、かくの如き企圖は或は單なる一つの思ひつき以上に出でないものであると評し得るかも知れない。

素よりショーンドルフの著作は單なる小冊子（本文六十頁）に過ぎないのであつて、社會學上の重要問題を一々詳細に取り擧げ得ない程のものではあるが、しかし吾々の批評はこの故に苛酷に過ぎることはない。唯だ吾々が彼の著作に興味を覺へる所以は、彼の人間類型學が個人の社會的諸關係を考慮する行動學としての社會學と考へられ、社會誌的方法に基づいて個人の社會誌を現實的に確定し、その上に類型社會誌を設定するといふ企圖にある。

最後にショーンドルフの著作に關して尙ほ一つの點を注意して置く必要があらう。それは既に彼がその著作の表題に示してゐる「國民科學」と云ふ言葉に關してゞある。

彼の云ふ所に依れば、總ての社會主義は社會秩序の何等かの變革と改良とを目指してゐるが故に、自ら一つの社會學を發展せしめてゐる。マルクシズムはその中心對象として階級を持つが故に、それは階級社會學であり、これに對して國民社會主義の中心對象は國民であるが故に、それは一つの國民社會學を、國民理論を、國民科學を發展せしめる。そして國民社會主義は全體としての科學に對して嘗つて失はれてゐた一切の科學的努力の統一點である所のもの、即ち國民を與へてゐる。かくて今日のドイツ社會學の任務は現在のドイツ國民の生活の裡に、且つ總ての個別的科學の中心點に於いて見出されねばならない。そしてドイツ社會學のこの今日の任務に相應する主要問題こそ、彼の著作の表題が示す所の「人間に關する國民科學の確定」にある。

ショーンドルフのかくの如きナチス的立場の自己是認に對する批判は別として、彼のかくの如き意圖が彼の人間類型學に於ける類型社會誌の確定に際して、人間の社會的行動の動機中、先づ「國民と祖國」に關するものを擧げてゐることに現はれて居り、且つかくの如き動機を最も生々とした狀態で示してゐるものが彼の利用せる從軍學生の手紙にあることだけは、讀者も明かに看取せられる所であらう。

J. O. Vértes, Die Grundlagen einer Milieupsychologie, Milieu und Kind, 1937,

環境心理學的研究は、從來大學の心理學實驗室から出て、日常生活の過程に於ける人間の研究が行はれたる場合に、既に多少とも見るべき結果を殘してゐる。しかし環境心理學が稍ゝ明確な學問的形態を取つて心理學の分野に一つの地位を獲得し始めたのは、全く最近のことに屬してゐる。それは主としてブーゼマンの「敎育的環境學」に因るものであると云つていゝ。（註一）今私が此處に紹介しやうとするフェルテスの「環境心理學諸原理」は元ド

イツの心理學雜誌に掲げられた一小論文に過ぎないのではあるが、（註二）彼の環境心理學の全貌を示すに足るものであり、またブーゼマン以後の諸環境心理學に對して甚だ興味ある特色を持つて居り、且つ吾々に示唆する所可成り大なるものがある。從つて彼の見解は一環境心理學理論として、日常生活に於ける人間研究に興味を有するものゝ何人も、これを看過し得ない文献の一つである。尚ほフェルテスは副題に「環境と兒童」といふ言葉を附加して居るけれども、それは單にブーゼマンの環境心理學が教育的環境學として現はれてゐるのに相應して、兒童心理學或は教育心理學との關聯の重要さを示唆したるに過ぎないのであり、事實また彼の對象は單に兒童のみに限られてはゐない。從つて彼に於いても亦吾々に取つても、右の副題は寧ろ重要のものではない。かくて彼の理論は一般環境心理學に屬するものであると云つていゝ。

（註一）ブーゼマンの著作に就いては、嘗つて私が本誌上に於いて指摘して置いた所であるが（本誌、第三十卷、第五號、一二〇頁）此處に再びこれを示せば次ぎの如くである。

A. Busemann, Pädagogische Milieukunde. I. Einführung in die Allgemeine Milieukunde und in die pädagogische Milieutypologie, 1927.

Demselben, hersg. von, Handbuch der pädagogischen Milieukunde 1932.

尚ほ吾國に於いては最近左の如き二書、即ち

久保良英著　環境の心理、　昭和九年。　　細谷俊夫著　兒童環境學　昭和十年。

が存して居たのであるが、今春公にせられた、山下俊郎著「教育的環境學」（岩波書店）はブーゼマン並に彼以後の諸說をも相當に考慮せる、有益なる一參考文献であることを讀者のために指摘して置く。

（註二）Zeitschrift für Psychologie, Bd. 133, 1936.

フェルテスの所論の全體は彼の簡單な言葉に從つて云へば次ぎの如くである。即ち、彼は主觀的環境投影 Subjektive Milieuprojektion なる環境の第一次的要因を明かにし、適當及び不適當、正常及び異常、兒童及び成人環境の各々對立せる環境の區別を確定し、更らに主觀的環境投影の觸媒作用、客觀的環境の主觀的環境投影に對する關係を問題とし、最後に環境類型を論じ環境心理學の任務と方法とを明かにせんとする。此處に彼の所論中著しく特徵的であるのは、觸媒作用を持つ主觀的環境投影に關する所說であつて、それに關聯して環境の區別に於いて特に適當環境と不適當環境とを分つ見解が吾々に甚だ興味あるものである。

フェルテスに從へば、環境は個人に影響を及ぼす外的環境要因と內的環境要因とからなる。外的環境要因を構成するものは現實の世界であり、內的環境要因とは主觀的環境投影であり、それは外界の意識への移行である。此處で吾々の先づ注意しなければならないのは、彼の謂ふ環境概念が單に客觀的環境に依つてのみ措定せられてゐるのではないことである。然らば主觀的環境投影とは何であるか。

同一の客觀的環境の各個人の意識に於ける反映は異なつて居り、また同一個人に於いても年齡を異にして——或は小供と大人——それは異なるものである。この各人各樣なる主觀的環境投影は、心理學的には、意識の層の下に存してゐると考へられ、從つてそれは「客觀的環境の、人間精神の無意識的所產である」とせられる。しかもこの無意識的所產である、主觀的環境投影は、宛かも化學的過程に於ける觸媒と同樣に、意識的反應を呼び起す觸媒的作用を持つてゐる。そして環境體驗は總てこの觸媒作用を持つ主觀的投影に順應するものであり、また環境の影響と見做されるものはこの心理的觸媒に因る個人に對する客觀的環境の作用であつて、それは正に間接的のものであ

る。かくてフェルテスの謂ふ主觀的環境投影は彼の環境心理學に於ける中心問題であつて、それは正に說明原理としての意義をも持つてゐる。

然らばかくの如き觸媒作用を持つと見られる主觀的環境投影は何故に各人各樣であり、また如何にしてそれは同一個人に於いて變化し、發展するか。この最も重要にして基本的な問題に對するフェルテスの回答は、不幸にして充分滿足なものではない。彼は全くこの基本問題をば意圖的には取り擧げてゐない。彼のこの問題に對する回答と見做される見解は、彼の序述の此處彼處に散在して居り、かくてその所見の明瞭さに多少欠ける所がある。例へば、彼は諸種の心理的機能と主觀的投影との心理學的相違を述べ、その內で興味と主觀的投影との明瞭に區別すべきものであることを論じてゐるが、主觀的投影の裡には無意識的に興味が含まれてゐるとも解されてゐるやうである。また主觀的投影を構成するものは第二次的表象であつて、この第二次的表象は個人的に相違するし、且つその相違は第二次的表象の多少にも存すると考へられて居る。更らに彼は別の場合に、各個人の主觀には外界の種々なる一切の所與が近づき得るものではない、とも述べてゐる。或はまた彼の經驗的に確認する所に依れば、長年に渡つて同一職業に從事してゐる人々の間には、肉體的並に精神的相似性が現はれて居り、同一集團に屬する人々の間に於いてもこのことは同樣である。

かくの如き諸言中から吾々の知り得る所は、彼の謂ふ主觀的投影には一定の個性的、指向的傾向があり、然かもそれは絕對的なものではなく經驗的に、換言すればそれ自體が客觀的環境の影響の下に變容せられるものであると云ふ點であらう。果して然らば、環境心理學の中心的課題として、先づ彼はその謂ふ主觀的環境投影の環境心理學的理論を詳細に展開すべきものであつたであらう。然るにこの根本問題を意圖的、系統的に取り擧げることなく過ぎてゐるのは、甚だ遺憾であると云はなければならない。かくて彼の環境心理學研究はこの至極不透徹な基礎の上に現實的な環境理論を構成しやうと云ふにあると見ていゝ。

フェルテスの主觀的環境投影に對する右の如き批評とは別に、更らに吾々は環境心理學に於いて主觀的環境投影なる要因を認めることの當否を問題としなければならない。そしてその問題は先づ心理學的問題として、吾々は無意識現象としてそれを認めねばならないか否か。更らにそれが說明原理としての、即ち環境心理學的認識の手段としての價値を問はなければならない。しかしこれ等の問題に答へることは私自身の今後の問題として置き度い。唯だ此處で讀者のために云ひ得ることは、主觀的環境投影を彼の如く說くことが、他の環境心理學に於けるが如く個性の客觀的表現である知的作業、或は行動を直接問題とするものに比較すれば、內面的心理過程をより明瞭ならしめるの效果はある。

主觀的環境投影なる要因に關して吟味すべき問題の存することは右の通りであるが、それは暫らく別として、この主觀的投影に基づく現實的環境理論中、吾々に興味ある一つの見解を擧げれば、それは客觀的環境をば適當及び不適當に分つフェルテスの見解である。然らばその謂ふ適當環境とは如何なるものであるか。彼は適當環境を二重に解釋する。即ち一は理想的適當環境であつて、それは人間の肉體的並精神的發達に對して最善の影響を及ぼすと考へられるものである。しかしかくの如き理想的環境は現實の生活中に屢ゝ發見せられるものではない。其處で彼は一方では日常生活に於ける環境影響の平均價値を考慮し、同時に他方では各人がその內で生長して來た所の環境を以つて適當と見做してゐる。また更らに具體的に云へば、假令へ理想的環境の意味から甚だ離れて居り、加之個人の肉體並に精神に對してある程度の有害な影響を及ぼすやうな環境であつても、しかも各人の自我がこの有害な作

用に順應し得るやうな場合には、彼は尙ほこれを適當環境と見做すのである。そしてこれを彼は先きの理想的適當環境から區別して、現實的適當環境と呼ぶ。

其處でこの現實的適當及び不適當環境に關する彼の理論を一二擧げて讀者の參考に供すれば次ぎの如くである。不適當な自然的環境は不滿足の感情を增大せしめ、從つて人をして其處から逃避せしめるに至る。例へば海外移民は新しい環境に全く不慣れであり、それは時に屢ゝ堪へ難きものでさへあり、唯だ其處に於ける生存競爭のみがよくこの環境影響を克服し得る。かくて時に移民に取つては新しい環境は不適當環境として、軈て彼等を祖國に引き寄せるのであるが、父母の移民地に生れ、其處に生長した所謂第二世に取つてはその兩親とは全く異なり、其處に適當環境が見做されるのが普通である。また文化的環境に關して云へば、失業の結果として、或は轉職に依つて人が從來とは異つた職業の文化的環境の裡に立つとき、吾々の問題は新しい環境への順應が如何にして行はれるか、換言すればこの場合の最初の不適當環境は時の過ぐると共に適當環境に變化し得るものであるかどうか、である。

客觀的環境に關する適當及び不適當環境の理論は、フェルテスの環境類型論と密接に關係する。其處で私は彼の擧げる環境類型を此處に簡單に紹介して置かう。彼は（一）客觀的環境の形態、（二）主觀的環境投影の形態、及び（三）客觀的環境への順應の程度、この三つの規準に從つて環境類型を次ぎの如くに分類する。

（一）、A農村環境、B都市環境、C工業環境、D隔離環境（上流階級の）

（二）、A正常或は異常、B適當或は不適當、C年齡と共に變化するもの、

（三）、A固定的、B順應的、C獨自的、

以上紹介した諸論を通じて既に明かなやうにフェルテスの所論は主觀的環境投影なる要因を認めることにその基本的特徵を認めることが出來る。即ち適當或は不適當環境と云ふも、また私が特に紹介しなかつたけれども、正常或は異常環境と云ふも、環境の主觀的投影から離れては充分に理解し得られない。事實彼の云ふやうに、一切の環境諸要因は一つの統一ある全體を構成して居り、「主觀的要因がその中心點であり、客觀的要因は周邊的要素としてこれに結びついてゐるのである。」

通常環境心理學の問題は客觀的環境の個人に及ぼす影響に重點を置いてゐるのであるが、從來その研究の態度は主觀に客觀を對立せしめるにあつた。そして個々の心理的機能が種々なる客觀的環境因子、或はそれ等の個々の因子の一定の複合狀態に依つて如何なる影響を蒙るかを確證するの域を多く出でないものであつた。そしてそれは多く兒童心理學の範圍に限られる傾向があつたのであるが、しかし吾々はこの從來の研究の枠を超へて兒童から青年へ、青年から成年者の問題へと進むことが必要であると同時に、個々の、しかも單に知的機能の研究から、全體としての個性の研究へ、しかも個性の現實的研究へ、更らに具體的行動の研究へと進まなければならない。謂はゞ現實生活に於ける人間研究へ突入しなければならない。このために、また此處で初めて一般的環境心理學の理論が成立する。從來の環境心理學はこれに比較すれば僅かにその發展の端緒を示すに過ぎない。例へば適當或は不適當環境の問題、換言すれば過去に於いて既に一定の環境の形成的影響を受けてゐる個性が現實の新環境の下に如何に反應するかの如き問題は、從來の環境心理學的研究からは相當離れたものである。フェルテスが問題を此處まで持つて來てゐることは、兎も角一般環境心理學への望ましき發展を示すものとして、正に吾々の注意に價ひするものであると云つてい、。

かくの如くフェルテスが環境心理學に重大な發展を示し、現實の人間研究としての環境心理學の意義を示し得た

のは、單に客觀に對して主觀を對立せしめるのではなく、主觀的環境投影なる要因を、中心とする環境研究に發足してゐるからであるとすれば、それだけこの環境の主觀的要因は、彼自身に於いて、更らに熟考せられ、遙かに明瞭な説明を以つて吾々に提供せられたらんには、彼の貢獻は更らに大なるものであつたであらう。

（昭和十二年八月五日）

バウリ女史著『ナッソォ・シィニィオアと古典經濟學』

高橋誠一郎

吾人が爰に紹介せんとする『ナッソォ・シィニィオアと古典的經濟學』(Nassau Senior and Classical Economics.)はバウリ教授（Arthur L. Bowley）の令嬢であり、昨年三月倫敦大學に於いて哲學博士（經濟學）の稱號を授けられたるバウリ女史（Marian Bowley）の學位論文であつて、本年倫敦に於いて出版せられたものである。

女史は一千九百二十八年より同三十一年に亙つて倫敦經濟學校（倫敦大學）に學び、經濟學得業士の稱號を得、其の後、フランクフルト・アム・マイン及び維納に學び、アバーリストウィズのウエールズ大學校の經濟學及び統計學臨時講師、倫敦經濟學校研究生、バーミンガム大學經濟學及び統計學臨時講師を經て、今現に牛津エコノミスト・リサーチ・グループの研究書記の職に在る雋學の婦人である。

シィニィオアは一千八百二十五年より同三十年に亙り、牛津大學ドラモンド教授（Drummond Professor）として、英國の銀行家にして又政治家であつたヘンリィ・ドラモンド(Henry Drummond)によつて初めて牛津大學に開設せられた經濟學の講座を擔任し、更らに一千八百四十七年より同五十二年に亙つて再び之れを擔當した。彼れが前の教授時代に於いて行へる多くの講義は或ひは別箇に刊行せられ、或ひは一千八百三十六年の名著 Outline of